
change • life

CACAONOVEL12

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

change・life

【Zコード】

Z5942W

【作者名】

CACAO NOVEL12

【あらすじ】

席次1番、運動神経抜群、通信簿オール5の満点美少女・桐嶋愛
蝶^は、超快樂ドあほの転校生・葛城海斗^{かづらぎかいと}
、愛蝶を取り巻く仲間たち・・・。

「友情なんて 幻^{すが}」という孤独な考えをもつ愛蝶が、傷つきながらも恋、友情を学ぶ青春ストーリー。

私の愚痴

人はめんどくさい。

自分の言いたいことをがまんして言わず、周りの顔色ばかり伺い、騙し、騙され、偽りの友情を深めていく。

人は残酷だ。

自分さえよければいい、友達のふりして、最後は手のひら返して笑い者にする。

だから私は一人を選んだ。

嘘はつきたくない。

傷つけたくない。

傷つきたくない。

友達なんていらない。

友情なんて幻だ。

騒がしい教室で、私は一人、机に参考書をひろげる。

皆自分らの置かれた状況を理解していない。

明後日は中間テスト。

中三のくせして、勉強している気配が全く感じられない。

将来のことは、考えてないみたい。

(馬鹿じゃないの?)

でも注意なんかしない。

だつてこいつらの未来心配してられる余裕なんかない。

私の予想では、ここにいるやつらの80%は就職難民になる。

(ふん、ざまあみろ!)

私は中一の頃から席次はずつと1番。

体育は満点。

通信簿は毎回オール5。

誰もが認める満点女子だ。

そのせいか、周りは私を遠巻きにしている。
こんなやつらと一緒になつたら、馬鹿がうつる。

嫌いだ。

ガラツ。

派手な音を立ててドアが開いた。

私の邪魔

ガラツ。突然ドアが開いた。

すると、知らない男子が嬉しそうに教室を見渡す。

「ねえ、なんか超カッコ良くない？」

「ヤツバ！あたし超タイプ〜？」

女子がこそそし始める。

なるほど。これが世間で言うイケてるメンズ、略してイケメンか。

・・・って！

納得している場合じゃなーい！

なんの急に！

転校生？そんな話きいてない！

てゆーか、担任がクラス委員長である私に話さないはずない！

そんなことを考えている私や、クラスの連中の前で、彼は悠々と黒板に自分の名前らしき文字を書いた。

「葛城 海斗です。今日からこの3・4の一員になったので、宣しく！」

にっこり笑う彼に、女子はずつキューン！となる。

カツラギ カイト・・・どつかで聞いたことがあるよつな・・・。

その時、

ガラツ。またドアが開いた。

今度はウチのクラスの担任と、隣のクラスの担任が立っていた。
二人は困惑した表情で、

「困るよ、葛城君」

「そうですよ。君は、4組ではなく、3組の転校生なんだよ？」

とか、何か言い始めた。

でも当の本人は・・・

「先生、オレもう自己紹介も終わらせちゃったよ。もうこのクラスがいい！」

とか問題発言をしている。

「え？ 葛城君つて、ウチのクラスじゃないの？！」

「え～！？ やだあ～！ せつかくイケメンきたのに～～」

クラスまでもが混乱し始めた。

いかん！ ここはクラス委員長の出番！

私は席からすっと移動し、ドアに足を運んだ。

私を見ると、先生が安心したように

「あ～、桐嶋さん。葛城君になんとか言つてくれないかしら？」

「・・・わかりました」

私は葛城海斗に向き直ると、少しキツめの口調で彼の説得にあたった。

「葛城君よね？ アンタなんでここのクラスにこだわつてんの？」

「君名前は？」

「・・・なんでここのクラスにこだわるの？」

「え？ なんとなく。ていうか、名前は？」

「・・・聞く耳持たず・・・とまではいかないか。

「とにかく、アンタはウチのクラスじゃないくて、隣の3組の転校生なの。早く移つてくれる？」

「君キツイこと言つね！ クラス委員長？ シンデレラ娘？」

「・・・（怒）」

「だつてクラスは転校生の田中じゅん！ オレこのクラスでやつてしまいの！ お願い！」

手を合わせて頼み込む彼。

「私に頼まないでくれる？」

先生に

「どうします？」

「こうと、

「そうねえ、彼がここにいたいなら、それでいいんじゃないの？」

「そうですね、僕からもクラスの連中に話しておきますよ」

あつたり承諾。

私出てこなくてもよかつたのかも。

「ラツキー てことで宜しく！えーと・・・」

「クラス委員長の桐嶋さんよ。頼れる人だから、分からないうことがあつたら彼女になんでも聞いて」

「宜しく！桐嶋！」

「・・・席は空いてるのに座つて」

私は速やかに席に着いた。

空いてるのは、前にウチのクラスから転校した皆川の席。

私は窓際の席で、列の最後尾。

葛城が座る席からは結構離れている。

葛城の席の付近の席の奴らが

「よひしつく！」

「よひしくね！」

とか言つてゐる。

ああ、ウザイ！

我ならあのウザさに耐え切れないと！

「あー・・・うん。オレ、こっちじやなくてさあ・・・」

「ん？」

「桐嶋の隣に行くんだけど・・・」

「マジでか！？」

「桐嶋か！ズリーぞ！」

騒ぎ出す男子共。

女子は私をチラチラ見ながらコンコンしてゐる。

「もおー！最悪うー！」

גַּם־בְּבָבָרְגָּם

オレは新しく足を踏み入れることになった教室の前で、気合いをいれた。

新しい教室 新しいクラスメイト……そしてなにより……
彼女探しができることに嬉しく思った。

放課後女子に呼び出されたと思ったら、クラスの女子全員がオレを

そしたら、鬼のような形相のクラスのマドンナ2人がオレの前に仁立ちして、

「私この女、どちらを選ぶの？」
と。言つてきた。

オレは啞然とした。

「そうよ、墓城君はアンタみたいな見た目だけの女じやなくて、見た目も中身もパーフェクトなあたしがいいに決まってるじやない！」

イヤイヤ、なんの話？

「なによ！アンタこそ、なんのそのタツサイ髪！この性悪女！、葛城にはね、私みたいな女が合づのーーー！」

「はん…当の本性を表したわね！」

この化粧才バケ！」

「かかっておなせ」よ!」

「いはマドンナ」一人は喧嘩だけでなく殴り合ひの大ケンカはまで発展した。

オレが間に入つて

「オレは、誰かと付き合つとか考えてないから…」

と言つて、教室を後にした。

あの頃は、ケアが大変だったなあ・・・。

なにがともあれ、オレは晴れてこの学校の生徒。新しく目標立てて、頑張んなきやな。

ガラッ。思いつきドアを開いた。

すると、新しいクラスメイトは、啞然呆然。

「ふう~」

大きく息を吸つて、教室に足を踏み入れた。

ずんずん教壇まで進み、できるだけキレイな字で、

葛城 海斗

と、大きく書いた。

「葛城 海斗です。今日からこの3・4の一員になったので、宜しく！」

周りは、おおお~みたいな感じになつてている。

やりい~!!

ガラッ。オレの後ろでドアが開いた。

振り返ると、先生が何故か一人、立っていた。

「困るよ、葛城君」

「そうですよ。君は4組ではなく、3組の転校生なんだよ?」

え?ええ~!!???

嘘だろ!?

オレ教室間違えたの?

先生も困惑した表情になつてている。

どうしよ~!

このままじゃー・・・

「先生、オレもう自己紹介終わらせちゃつたよ~。もうこのクラスがいい!」

よしそ、これでなんとか、いけそ~

「葛城君よね?アンタなんでこのクラスにこだわつてんの?」

居心地はいいが、なんか怒ってる声。

よく見ると、そこにはすんぐく可愛い美少女が。顔の輪郭は卵みたいにすっとしていて、目は大きめで、黒目が大きい。

鼻筋はすっと通っていて、

唇はふるんとしている。

しかも、顔が可愛いだけでなく、ウエストもきゅっとしていて、

足も細長い。

なにより黒髪をサラッと流していて、

いい香りを漂わせている。

その美しい佇まいが大和撫子のようで、オレは一目惚れしてしまった。

「君名前は？」

「聞きたい！教えて！」

「・・・なんでこのクラスにこだわるの？」

無視。それじゃ！

「え？なんとなく。ていうか、名前は？」

「とにかく、アンタはウチのクラスじゃなくて、隣の3組の転校生なの。早く移ってくれる？」

「君キツイこと言つね！クラス委員長？シンデレラ娘？」

「・・・」

なんか怒らせちゃった？

「だつてクラスは転校生の自由じゃん！オレこのクラスでやつてきたいの！お願い！」

お願いします！初恋は叶えたい！絶対！

「どうします？」

「そうねえ、彼がここにいたいなら、それでいいんじゃない？」

「そうですね、僕からもクラスの連中に言つときますよ、よっしゃああああ！！！」

「クッキー? ハンビング? えーと……」

なんて名前？

「クラス委員長の桐嶋さんよ。頼れる人だから、分からぬことがあつたら彼女になんでも聞いて」

・・・下の名前何かな?

宣しく！樋嶋！

卷之二

卷之三

ג הושג

「よろしくねー！」

けど

「？」

「桐嶋の隣に行くんだけど・・・」

「同鳥か！ズレぞ！」

オレの青春スタートだぜ！！

方の青春アドレットさせ!!!

私の驚き

「桐嶋の隣行くんだけど……」
はあ？！

なんなのコイツ！

こういうのが、私の一番嫌いな人種なのにいー！

「もおー！！最悪う！！」

男子に冷やかされ、女子に残念そうに見られてもお構いなし。
私の隣の席に移動するなり、

「宜しく、桐嶋！」

また笑顔。

でも、さつ毛皆に見せてた笑顔とは何か違う……。

「コイツ、私のことビビつ思つてんの？」

「・・・宜しく」

適当に答えた。

そして、コイツは

「怒つてるの？」

と、いきなり言つてきた。

「別に」

そつけなく返す。

そのまま微妙な空気が流れたまま、ホームルームは終わつた。

「葛城い。理科室行こうぜえ」

男子が呼んでる。

「おおお！」

返事して、私を気にするよつて、横田でチラッと見て、そのまま行つた。

ま、さつ毛と行つて欲しいんだけど。

男子に続いて女子も塊になつてどんどん教室を出て行く。
気づけば教室には私しか居なかつた。

さてと。

さつさと鍵しめて私も行こうと。

次の授業もついでに準備しとくか・・・。

鍵をちゃんとしめて、私は教室を出た。

廊下を歩いていると、

「桐嶋！」

誰かに呼ばれた。

振り返ると、隣の2組のクラス委員長・斎藤 この斎藤、結構モテるらしい。

去年の3年生に告白されているのを見た。 いろんな所で、噂をよく聞く。

・・・私のことが好きだとか。

もちろん、私はそんなの信じてない。 そんなの・・・おかしい。

冗談に決まってる。

「何の用？」

「いや、今日の放課後クラス委員長の集まりがあるから・・・」

「え？ それって明日じゃないの？ 変更になつたの？」

思わず驚いてしまつた。

「うん。 学年主任が君に伝えといてって」

「あ・・・。 そなんだ・・・」

「それでさあ・・・」

「何？」

「今日一緒に帰らない？」

「・・・・・・・・・・・・え？」

一緒に帰ろうなんて、皆川以外、私に言う人は居なかつた。

「駄目・・・かな？」

「別に。 大丈夫だよ」

「ヤバい！ 思わずOKしてしまつた。

「そつか！ それじゃ、放課後！」

裕也が立っていた。

斎藤は笑顔で立ち去つた。

ええええ！！！！

どうしよ・・・。

まあ、斎藤はボディガード代わりにでもなるかな。
ぼおつとしてる場合じゃない！

早く理科室行かなきや！

授業中もずっと斎藤のことが気になつていた。

斎藤つてなんで私にそんなこと言つたんだろ・・・。
葛城といい、斎藤といい、今日はなんでこんなに男子が寄つてくる
の？

メンドクサイ・・・。

気づけば、授業も終わつていた。

教室に戻ろうと席を離れた私に今度は、

「ねえ、桐嶋さん」

女子が話掛けてきた。

しかも、男子に人気が高く、女子に嫌われている、安西 由奈。
顔はまつげが長くて可愛いんだけど・・・。

男子に向ける笑顔と女子に向ける笑顔が違う。

彼女自身、女子に好かれようなんて思つてないみたいだけど。
「・・・何？」

気になる

「へ？ 桐嶋の下の名前？ なんで知りたいの？」
「あ～・・・一応隣だしさ・・・」

下の名前で呼んでみたい、なんて言えるかあ！

「えーと・・・確か・・・」

「あれ？ なんだっけ？」

「なんかメチャクチャ変わった名前だったよな」
変わった名前？

「う～ん！ 最終手段だ！ 女子に聞くつい！」

そう言いつとその辺で盛り上がりってる女子に話し掛けた。
「なあなあ、桐嶋の下の名前ってなんだっけ？」

「はあ！ ？ なにそれ！」

「でたよ、でたよ。男子の桐嶋びいき」

「いいじゃんかよ！」

「はいはい、りょーかい」

「確か、愛蝶だつたよね？」

・・・アゲハ？

「あ～！ そろそろ愛蝶！」

「サスガ出鳴先輩の妹だな！」

おお！ 名前だけでなく、お姉さんの名前ゲット！

「だつてよ！」

「うん！ サンキュー！」

オレは女子にはにかんでみた。
すると女子は頬を染め、

「う、うん」

「役に立てたんなら・・・」

そう言いながらどつかに退散。

悪いけど、今のは誰にでも見せる顔だよ。

「あ！ いけねえ！ 忘れ物しちまつた！」

「マジかよ！」

「後3分！ 急げ！」

「うつし！ 2分で取つてくる」

「よーい・・・ウドン！」

アホ臭いコールで新しい仲間はオレを見送った。

オレは足に自信があつたし、急いでいたのでダッシュした。

教室前の廊下に入ろうとした瞬間！

桐嶋の後ろ姿が目に飛び込んだ。

思わずオレは急ブレーキをかけた。

幸い、桐嶋には気付かれずにすんだ。

でもあんまり急だつたせいで、足首をひねった。

すんげーズキズキする。

勇気を出して、話かけようとした。

が、桐嶋が誰かと話しているのがすぐに分かった。

なんだコイツ？

顔は結構整つてて、身長はオレと同じくらい。

でもなんか・・・。

桐嶋に色気目使つてるような気が・・・。

確証はないが、オレの経験でなんとなく分かる。

桐嶋を誘つてんのか？

うつ、うつからじや聞こえない。

そうしてるうちに、ソイツはどうかいつた。

桐嶋はヤツが去つた後も、しばらく突つ立つていた。

すると急に我に返つたよつにはつとし、オレとは別ルートから移動場所に行つた。

オレも急いで忘れ物を取つて教室に向かつて走つた。

アイツは誰なんだ？

桐嶋を狙つてんのか？

何を話したんだ？

『死にたる・・・。

私のムカツキ

「何？」

いきなり話掛けられた。

しかもスカート曲げてるヤツに。
化粧もヤバイし、髪も染めてる。
でも、素の顔は可愛いかも。

案外いい人だつたりして？

「アンタ、ナニ様のつもり？」

前言撤回。

「・・・・はあ？」

「ちょっと可愛くて男子共にモテルからつて、威張んないでよ」
意味わかんない。

「なんのこと？」

「惚けんじゃないわよ。

葛城海斗といい、斎藤といい、なんでアンタみたいなヤツが人気
なのよ」

「知らないわよ、そんなこと」

「ふん、まあアンタみたいなヤツはどつせ男に興味無い振りしてん
でしょ」

力チンときた。

「思いたきや、勝手に思えばいいじゃない」

「はあ？」

今度は安西がイラつく番だった。

「思い込みが激しい」と。

大体、なんなのその身なり。

髪を染め直して、化粧落として、第一ボタンしめて、
リボンキツくして、シャツ入れて、スカート直して、
靴下変えてから私に指摘しなさい！」

「なつ・・・」

私の説教マシンガンにうつたえない者はいない。
踵を返して私は教室を退出した。

ふん、ざまあみろ。

教室に戻ると、男子が馬鹿馬鹿しいことをしていた。
黒板には、「彼女にしたい女子ランキング」という文字がでかでか
とあつた。
暇なヤツらだ。

ふと1位のほうに目をやると、そこには・・・。

気になる。

何を言われたのか、桐嶋は授業中もずっと上の窓ついて感じだつた。
だが、オレの読みは的中した。

やっぱ桐嶋は可愛い。

どこか遠くを見つめるその瞳はとても澄んでいた。
綺麗だ。

オレはこんなに人にトキめいたのは初めてだつた。

「う~しつ~アレやるぞ~!」

休み時間。

オレは教室で仲間と遊んでた。

もちろん女子もいた。

だが、「アレ」と言つた瞬間、
「トイレ行こ」

と、顔を赤くしながらどうか行つた。

その他の女子も、皆様子が変わり、緊張した空気になつた。

「アレって何だよ?」

オレは仲間に聞いた。

「見てればわかるつて」

それ以上は話してくれなかつた。

「アレって何だ?」

少し経つてから、白い紙が配られた。

配られたのは野郎だけ。

もちろんオレも。

野郎共は悩んだ様子だった。

「これで何すんだ?」

「彼女にしたい女子を書け」

そう言い残して去つて行つた。

なるほど。

これは「彼女にしたい女子ランキング」だな。

だから女子がああなつたんだな。

納得。

オレはできるだけキレイな字で「キリシマ アゲハ」と書いた。

隣にいたヤツは「アンザイ ユナ」と書いていた。

周りを気にせずオレは堂々と投票箱に白紙を入れた。

これで桐嶋を狙つてる奴が大体どのくらいいるかわかる。

「結果発表!」

場は更に様子が変わつた。

野郎はおおつ!と萌える。

女子はもっと緊張してるようだ。

オレは桐嶋のコトで頭がいっぱい、早く結果が知りたい。

黒板にベスト5が書かれた。

5位・・・違う。

4位・・・これも違う。

3位・・・いつも。

2位・・・もうないのか?

そして1位。

「桐嶼
愛蝶」

え？

桐嶋が1位？

ライバルは11人。

コイツら以外にもいるはずだ。

だか

私の初体験

そこには「桐嶋 愛蝶」と書かれていた。
はあ。

ここからはどこまで暇人？

私が気にするまでもないけど。

私はそう思いつつ、席に着いた。

男子は馬鹿そうな顔でニタニタ。

マジでキモイ。

女子はいつも通り冷たい視線のつもりらしい。
どうでもいい。

チャイムが鳴って、皆席に着いた。

授業中、何度か葛城が話掛けてきたけど、適当に返した。
午後の授業も全部そんな感じ。

流石にここまでやれば、葛城も私を嫌うだろう。

それでいいんだ。

それが私なんだ。

最後の授業とホームルームが終わつた。

これで今日の全日程が終了した。

私はさつさと帰ろうと、教室から出た。

玄関で靴を履き替えて出ると、斎藤が出口で待つていた。

「よう。早く帰ろつか」

当然のよつこ言つた。

チツ。

約束を破るのは好きじゃない。

でも断れなかつたからトンズラかこうとした。

でも斎藤は思つた以上にしつこかつた。

言われるがまま、私は斎藤について行つた。

すれ違うたびに振り返られた。

見せ物じゃないつ！て言いたかつたけど、控えておいた。

面倒は御免だ。

外に出ると、雨が降つていた。

どうしよう。

あいにく、傘が無かつた。

斎藤は持つていた折り畳み傘を取り出して広げた。

「桐嶋、一緒に入ろう」

そう言われて、思わず斎藤を見上げてしまった。

風邪を引くのは嫌だつたが、それ以上に人の傘に入るのは嫌だつた。

「私はー」

私が答える前に、斎藤は私の肩を掴んで走り始めた。

斎藤は笑つたいた。

私はなぜか震えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5942w/>

change・life

2011年11月26日21時07分発行